



## 第 43 回日本核医学技術学会総会学術大会 印象記

矢田 伸広  
Yada Nobuhiro

### 1. はじめに

第 43 回日本核医学技術学会総会学術大会は、まちびらき 10 周年を迎えたグランフロント大阪にて、2023 年 11 月 16～18 日の 3 日間、第 63 回日本核医学学会学術総会と合同開催された。大会長と実行委員長は、木田哲生先生（滋賀医科大学医学部附属病院）と山永隆史先生（大阪公立大学医学部附属病院）で、大会テーマは、「核医学の学びと創造—皆が主人公！」であった。大会は、現地及びオンデマンド配信でのハイブリッド開催で、12 か所の会場にて会長・大会長講演、合同シンポジウム、work in progress、卒後教育プログラム及び機器展示等が企画されていた。学会期間中は、多くの参加者で盛況である印象を受けた。筆者は、本大会と他学会の日程が重複し、現地にて久々に学会をはしごして参加し、企画の充実だけでなく学会シーズンを感じる大会にもなった。また、会場は大型複合施設であり、参加者が混乱することが心配であったが、スタッフの方々の案内が大変適切であり、混乱なく運営されていた。

### 2. 本学会に参加して

ハイブリッド開催が定着する以前の学会は、プログラムの都合上、各種シンポジウム、講演及び一般演題等は、両学会にて並行して企画されているために、関心のある講演をすべて拝聴することはできず、また、盛況にて会場に入れないシンポジウムや一般演題プログラムがあった。ここ数年、新しい学会の形として、現地、LIVE 配信、及びオンデマンド配信（後日）によるハイブリッド形式での開催がされ

ている。開催形式は、それぞれ利点があるために、参加者は目的に応じた利用により、これまで以上に充実した学会参加ができるようになっている。筆者は、現地参加において一般演題、講演企画、及びロビーでの様々なディスカッションにより、最新技術、核医学分野の動向、及びトピック等について、多くの情報を得た。また、後日の空き時間にオンデマンド配信にて各講座を視聴することで、より深く理解することができた。

印象に残ったプログラムの 1 つとして、会員による一般演題を挙げる。一般演題数は 137 で、PET 関連や核医学内用療法での線量管理だけでなく、SPECT、人工知能、及び各種臨床検査等の多岐にわたるテーマが発表されていた。本大会の一般演題数は、コロナウイルス感染症拡大前と比較すると戻っていないかもしれないが、それでも多く、内容が幅広い印象を持った。核医学内用療法における撮像技術及びイメージングを用いた線量管理は、計測精度向上を目的とした演題が多く、大変参考になった。多くの研究者が正確な線量測定、管理を議論し日本でも技術的な評価をすることは重要である。ここ数年のトピックスである核医学内用療法とアミロイド PET は、準備、治療・検査の実施、撮像技術及び管理の専門性が高い。核医学内用療法とアミロイド PET 検査は、実施する施設に限られるかもしれないが、核医学技術の発展及び臨床検査の質向上のために、全体で研鑽<sup>けんさん</sup>を積む必要があると感じた。今後、最新の撮像技術や臨床検査技術について、ぜひ勉強したいと考えている。

卒後教育プログラム（以後、同プログラム）は、

日本核医学技術学会の本部事業で、核医学専門技師認定単位の企画である。核医学専門技師資格取得を検討されている会員向けの基礎的な講座と、専門技師向けの専門的な講座で構成されている。同プログラムの全体的なテーマは脳核医学であった。各講座は、現在トピックである認知症を対象とした核医学診療、脳血流 SPECT 撮像の標準化、及びアミロイドとタウ PET に関する講演で、アルツハイマー型認知症者を対象とした治療薬の保険収載を念頭に、講師の先生方は、今後の認知症診断や臨床検査及び撮像技術に関して、専門的で詳細な講演をされていた。同プログラム 1 は、「認知症のための脳核医学」と題して、アミロイド (A)、タウ (T)、及び神経変性 (N) から成る ATN 分類の分かりやすい説明、脳血流 SPECT 画像作成、及びアミロイド PET イメージングのポイントに関する解説であった。特に、アミロイド沈着有無と診断、症状との関係について理解が深まった。同プログラム 2 は、日本核医学技術学会 SPECT 標準化委員会「脳血流 SPECT 撮像の標準化に関するガイドライン 1.0」の趣旨、Hoffman ファントム作成、及び解析についての解説だった。本プログラムは、ガイドライン改訂に向けた活動の一環であり、今後改訂作業が行われる。最後に、同プログラム 3 は、アミロイドとタウ PET イメージングに関して、多くの先行研究をもとに各種製剤における検査プロトコルや画像作成の違い等を解説すると共に、画像再構成条件の設定方法の講演だった。

基礎講座は、専門の先生方によるタスクシェア、脳領域の核医学と MRI、核医学の知っトク情報、及び読影医が求める PET/CT 画像等、6 講座設けられていた。基礎講座 6 講座と同プログラム 3 講座は、3 日間で 3 講座ずつ企画されており、参加者は、全講座を受講できる。また、一般演題は、終日企画されており、参加者は目的に合わせて聴講できる。重複した場合、後日オンデマンド配信で視聴可能である。

JSNMT 国際奨励賞受賞講演は、海外論文雑誌に採択された 3 名の先生方が表彰されると共に、研究の着想から論文採択までの道りを報告する企画であった。筆者は、日頃の研究に対する先生方のお考えを拝聴し、研究体制構築の重要性を感じたと共に、査読対応や不採択後の取組みについて大変参考になった。

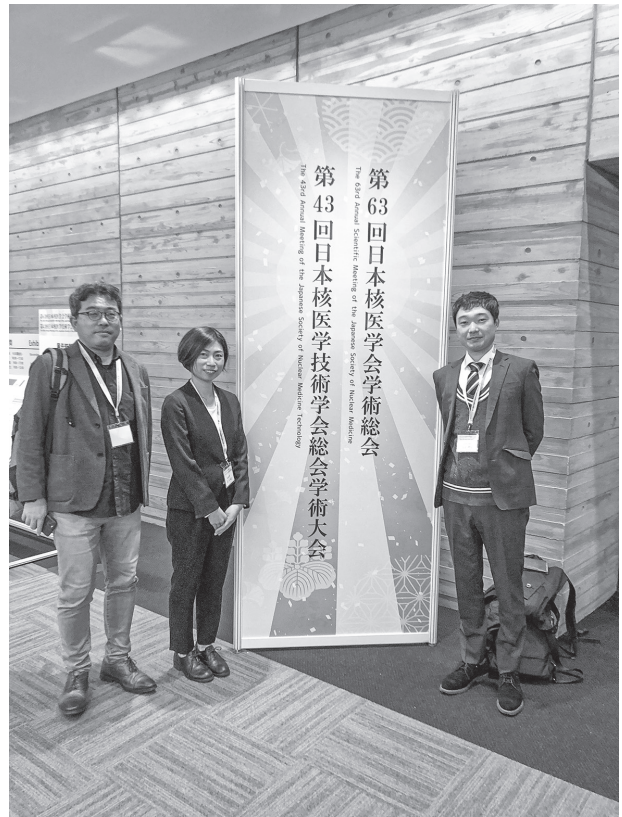


写真 左から松友紀和氏、深見光葉氏、筆者

### 3. おわりに

稿を終えるにあたって、第 44 回日本核医学技術学会総会学術大会の開催についてお知らせしたい。会期は、2024 年 11 月 7～9 日までの 3 日間で、横浜市（神奈川県）のパシフィコ横浜会議センター／展示ホール A にて、第 64 回日本核医学学会学術総会（会長：橋本順先生 東海大学医学部専門診療学系画像診断学）と合同開催される。パシフィコ横浜は、例年春の JRC 会場であり、会員の皆様にとっても馴染みのある会場であると思われる。メインテーマは、「築く・繋ぐ・核医学 Nuclear Medicine - Creation and Communication-」である。次回大会は、アミロイド PET や核医学内用療法に加えてセンチネルリンパ節検査の適用拡大に関する議論もされるのではないだろうか。現地にて多くの皆様とディスカッションできることが楽しみである。

（島根大学医学部附属病院 放射線部）